

批評家に望む

黒田清輝

- 方今美術批評は甚だ盛んで結構なことであるが、普通に行はれる一個の作品のよしあしよりも今一層深く突き込んだ批評が望ましい。
- 一個の作品に就いて一々細かに各々好い所に道理を付けて批評を加へるのも固より悪くはないが、それよりも、能く作品を觀、東西の國柄などを考へて大體の傾向、思潮を導くやうな批評を望む。又畫家の前途を教導するやうな氣前の批評が最も望ましい。
- つまり批評家は作家ではなく作家を作る人である。例へば橋本先生は作家で岡倉先生は最も見識ある批評家であつたと云ふが如きものである。
- それで批評家の使命は作家同志で解るやうな事を言て聞かせる計りではあるまい。作家等の氣附かぬ所に目を着け導て呉れなければ吾々は利益を得られない。
- ゆゑに批評家が、作家と一緒になつて、作家同志で言ひ合ふやうな事を言て居る丈では物足りない。
- これは私一個の考に過ぎないが、要するに、大體の傾向を指導し、作家の個人に對しては、其の特長を察して、教導するやうな批評が望ましい。

■而して批評家をもつと廣く美術を好いて大きな美しい心持になつて、自分の小さい窓から自然を覗いて居る憐れな吾々を可愛がるやうにして貰ひたい。(談、校閱濟)

『美術週報』丁四大正三年一〇月二十五日